

[7]

氏名	やまぐち き おと 山 口 季 音
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	文博第 230 号
学位授与の日付	平成 27 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	児童養護施設の教育環境に関する社会学的研究
論文審査委員	主査教授 多賀太 副査教授 山縣文治 副査教授 赤尾勝己

## 論文内容の要旨

本論文は、児童養護施設の内部における児童間および職員と児童との相互作用を通じた生活環境形成のダイナミクスを明らかにしようとするものである。

本論文の背景をなす「子どもの貧困と教育」研究においては、家庭の貧困が子どもの学習と教育達成に不利に働き将来の貧困をもたらすという貧困の世代間再生産との関連で、家庭における学習環境の実態に関心が向けられてきた。しかし、貧困下に置かれている子どもの中には「家庭で暮らせない子ども」も少なくないことを考えると、その子どもたちにとっての家庭に代わる生活の場、とりわけその代表である児童養護施設における児童の養育環境を明らかにすることは極めて重要な課題である。先行研究においては、出身家庭の様子に基づいて施設児童たちが学習上の困難を抱えていることが示唆されたり、施設児童の学力や進学率の相対的な低さや、児童数に対して圧倒的に少ない人数の職員配置基準などに依拠して施設における学習環境の不十分さが指摘されたりしてきたが、施設内部における児童の学習環境の実態はいまだ十分に明らかにされていない。

こうした問題意識に基づき、本論文では、児童養護施設の内部において児童間および職員と児童との間で展開される相互作用の質的データが分析され、施設内の生活環境形成のダイナミクスの解明が目指されている。この目的のために、著者は、近畿圏にある児童養護施設 X で週 1 回のボランティア活動に携わりながら参与観察を実施するというエスノグラフィックな調査方法を採用し、2 年間にわたって職員 6 名と小学生男子約 20 名との相互作用過程をフィールドノーツに記録していった。収集された膨大な質的データの記述と分析からは、以下の知見が得られた。

児童間の相互作用場面の分析からは、先行研究で指摘されてきた学習を阻害する生活環境が、子どもたち自身の相互行為を通して形成されている側面が明らかにされた。児童らは、与えられた課題を達成することよりも他人の落ち度を指摘し合ったり暴力を振るったりしながら自らの学習環境を悪化させていた。複数の暴力発生場面と児童の暴力への関わり方の通時的変化に関する考察からは、彼らの間に、そうした問題行為を助長するような仲間文化が形成されており、施設職員から見れば逸脱行為として見える暴力行為は、児童個々人の心理的・発達の問題のみに還元されるものではなく、児童らにとっては仲間集団

への適応行為としての側面を持つことが示された。

職員と児童との相互作用場面の分析からは、これまで明らかにされてこなかった職員による児童支援の具体的な様子とそのスキルの専門性の一端が明らかにされた。職員たちは、宿題をしようとしなかったり暴力を振るったりといった児童の様々な問題行動に対してその都度対応を試みていたが、それによって問題行動が収まらない場合も多く、その対応の仕方は必ずしも一貫していなかった。しかし、個々の職員の対応の仕方を、その前後の文脈や問題行動を起こす児童の生活背景に照らして考察した結果、一見すると場当たり的に見える職員たちの対応の仕方が、児童支援のための資源が大幅に制限された状況下で児童の良好な学習環境や学習意欲を保つための「即興の支援」とも呼ぶべき合理的な側面をもっており、支援の不十分さというよりもむしろ職員の専門的なスキルの一側面として理解されることが示唆された。確かに、そうした職員たちによる支援は、児童の学習意欲が削がれやすい生活環境を根本的に改善するものではないが、学習から遠ざかろうとする児童たちとのせめぎ合いのなかで「ぎりぎりの」学習環境を維持できているという点で、むしろ効果を上げていると評価されるべき点が指摘された。

## 論文審査結果の要旨

本論文には、テーマ設定、調査方法、経験的知見のそれぞれにおいて独自性ならびに意義が見出される。第1に、テーマ設定については、「子どもの貧困と教育」研究において従来「空白」部分とされてきた「家庭で暮らせない子ども」の学校外の学習環境の解明という新たな研究視角を提起した点に独創性が見られる。また、そうした子どもたちの代表的な生活の場として児童養護施設を調査対象に据え、従来の児童養護施設と子どもの教育に関する研究の多くが、家庭環境という「インプット」要因と教育達成という「アウトプット」要因に注目ながらも児童養護施設をいわば「ブラックボックス」化してきたなかで、施設内部での成員間の相互作用過程を明らかにしようとした点も評価される。

第2に、調査方法上の特色として、児童養護施設における長期間のエスノグラフィックな調査に基づく数少ない実証的研究の1つである点が挙げられる。施設の実態を明らかにしようとした先行研究の多くが、職員へのインタビューや施設で育った児童の退所後の語りに基づくものであるなかで、児童の生活の場であるがゆえに研究上のアクセスが非常に困難な児童養護施設内部において職員と児童との相互作用に関する膨大な質的データを収集し、しかも当該施設からそれらのデータの使用許可を得て執筆された本論文は、施設内部の実態を知る上で非常に貴重なものであり、地道なボランティア活動を通して施設側からの信頼を得た著者であるからこそ執筆されえたものであるといえよう。

第3に、施設内部の相互作用場面の質的データ分析を通して、新たな経験的知見を得た点にも本論文の意義が認められる。多くの施設で深刻な問題となっている児童の暴力については、それが児童個人個人の発達の心理的問題のみによって発生するのではなく、児童たちの暴力的な仲間文化への適応過程を通して発生している側面もあることが明らかにされた。また、施設児童の教育達成の低さゆえに批判の対象となりがちだった職員による児童への学習支援のあり方が、実は様々な制約のもとでの実践としての側面をもつことを指摘し、これまで必ずしも実証的には解明されてこなかった施設職員の言動の内実を、より一

一般的な社会的行為と共認可能な仕方で示せる可能性を開いた点も、本論文の貴重なデータと独自の研究視角あつてのものと評価できよう。

他方で、本論文にはいくつかの課題も見られる。まず、序論部分において論文全体の背景をなす理論的枠組みや仮説の提示が不十分であるため、事例分析にあたる4つの章相互の体系性や、提示された各事例の理論的意義が不明瞭になっている。また、質的データの使用法に関する本論文の理論的立場の説明が不足しているため、相互作用場面を分析したこと以外にいかなる意味で本論文を「社会学的研究」と呼べるのかがわかりにくい。さらに、施設内の学習室で生じている現象を分析した章はあるものの、言及された内容の大部分はむしろ施設の「学習環境」と呼ぶ方がふさわしく、本論文を「教育環境」の研究と位置づけることには疑問が残る。

しかしながら、これらの問題点は、本論文全体の独自性や意義を大きく損なうものではなく、今後の取組によって改善が可能であり、それらを克服することで本研究はさらに発展する可能性を秘めているといえよう。本論文が示した知見は、「子どもの貧困と教育」研究の学術的な発展に寄与することはもちろんのこと、児童養護施設における児童の暴力の背景や職員の実践への理解を深めることを通して、「家族で暮らせない子ども」の日常生活環境・教育環境の改善につながる外部からの支援や施策展開にも十分な示唆を与えるものである。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。